

シンポジウム

「歴史のなかの『ヒューマニズム』」

はじめに

小林雅夫

近代における教養の危機が問題視され、「教養の崩壊」が叫ばれて久しい。また、ヨーロッパにおける「教養の伝統」・「フマニタスの実態」の再検討が迫られてきた。近年、日本の大学でも学部の「一般教養」の内容が議論され、大幅な改革が進行してきた。日本もヨーロッパの教育の伝統を引き継いでいる点で例外ではないがゆえに、大学の一般教育科目の改革が引き起こした変革の波も決して小さくはないだろう。むしろ大学教育の根本的変質を迫っているようにさえ思える。

「われわれはどこに向かって歩んでいるのか?」、「われわれは何を目標としているのか?」、「われわれは何を理想としているのか?」「我々はどこに連れて行かれるのか?」このたび「早稲田大学地中海研究所」は、2006年3月に、≪「歴史のなかの“ヒューマニズム”≫というとても簡単には論じきれない大きなテーマを掲げてミニ・シンポジウムを試みることにした。今回の報告者は、古代は小林雅夫、ビザンツは和田 廣、ルネサンスは根占献一、近代ドイツを曾田長人が担当することにした。このテーマは、たまたま担当した4人にはそもそもとも論じられる問題ではなく、はるかに各人の能力を超えたものであったが、日ごろから興味を抱いてきたテーマだったこともあり、各人とも思い切って挑戦してみた。能力不足は痛感している。しかし、このテーマに取り組もうとした勇気だけでも認めていただければ幸いである。